

心の豊かさや経済合理性との折り合いはつけられる？

# 「小さな幸福」と「大きな幸福」のあいだ

ブータンでは国民の多くが「自分は幸せ」と答えるという。ヒマラヤ山脈中の小国が「世界一幸せな国」といわれる背景とは？ 文化人類学者と浄土真宗の僧侶という二つの立場からブータンを研究している本林さんに話を聞いた。

宗教人類学者・僧侶

## 本林靖久

●もとばやし・やすひさ 1962年、石川県生まれ。専門は文化人類学、地域社会学。現在、大谷大学、佛教大学、大阪大学で非常勤講師を務める。真宗大谷派僧侶。著書に『ブータンと幸福論』（法蔵館）など。

### 支え合った暮らし

私の生家は浄土真宗の寺で私自身僧侶なのですが、ブータンへの関心は、もともと「もとさんと」と呼ばれる真宗門徒が何を幸せと考えているのかを探ったことと、北陸の一部の真宗地域にある、墓がない村（無墓制村落）や、墓に木を植える習慣

への興味から出発したものです。無墓制は、墓を設けずに宗派の本山に遺骨の一部（ど仏）を納骨する風習です。墓を持たないので当然お墓参りの慣習もない。一説には平家の落ち武者が隠れ住んだ山里ゆえ墓を作らなかつたなどともいわれていますが、「墓を持つことが当たり前になつていて私たちにとって、そもそも墓とは何だろう」と考えてい

たからです。考えていたころは、日本全体はブルの真つただ中で、土地の値段はハネ上がり、大金をかけて墓を持たなければ「ハカない人生だ」といわれていました（笑）。その後、研究対象を国内だけでなく、タイやネパール、インドといったアジア各国へ広げ、各国の仏教寺院などで調査・研究をするようになったのですが、

そのうちの一つがブータンでした。

ブータンはインドと中国のあいだ、ヒマラヤ山脈の東端に位置し、面積は九州と同じくらい。人口七十万足らずのチベット仏教国です。就労人口の六割が農業に従事し、公用語はゾンカ語、普通教育はほぼ英語で行なわれています。

国民一人当たりの所得は、一九二〇ドル（世界銀行二〇一〇年）と、日本の二十分の一にも満たない。数字だけで見れば、世界の中でも貧しい国になるでしょう。

しかし、美しい渓谷に囲まれ、豊かな水と森林資源に恵まれています。農作物の自給率の高さもあり、農村部では貧困層が少ない。特に西部では、ほとんどが自作農家で、農作物を売買して現金収入もあります。伝統的な農家の家屋は三階建てと大きく立派な構えで、そこに二世代

から三世代、多いところでは十数人が生活を共にしていて、家族全員で農作業に従事して支え合つて暮らしています。

### ブータンには墓がない

日本人の尺度では、貧しさは不幸の要因の一大事と考えられています。確かにモノの量やお金の保有だけで考えれば日本人よりもブータン人は不幸となりますが、モノやお金がないのに、国民の多くが「自分は幸せだ」と感じている。

モノがあふれている日本で、日本人自身があまり「幸福」を感じず、「不安」を口にする人が多い一方、モノが少ないブータン人は「幸福」を実感している。この違いは何なんでしょうか。

そこで考えるのは、ブータン人が

感じている「幸福」の正体です。彼らは何をもちて幸せと感じているのか。ブータン人の幸福の本質を理解するためには、やはり、まず彼らの宗教的世界観に目を向ける必要があります。

たとえば冒頭に挙げた無墓制。ブータンには墓がありません。火葬で弔つたあと、灰や骨のほとんどは川に流す。遺骨の一部を持ち帰り、砕いて粉にし、粘土と混ぜて型を抜き、高さ五センチほどの「ツアツア」と呼ばれる円錐形の塔をいくつも作る。ツアツアは寺院など宗教施設の外側や風通しのよい場所に並べられます。ヒマラヤからの風に吹かれるうち、ツアツアは風化し、二、三年もすれば跡形もなくなる。

ブータンでは「風は宇宙の息」と考えられています。ヒマラヤから吹きおろす強い風によって、死者の魂